モーツァルト室内管弦楽団　第157回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester / 157. Regulärkonzert

～ニューイヤーコンサート・モーツァルト名曲集～

2014年1月19日（日）午後2時■いずみホール

Sonntag, 19. Januar, 2014　14Uhr●Izumi Hall Osaka

■主催：モーツァルト室内管弦楽団　http://moz-kam.org

■特別協賛：高松建設　■協賛：いずみホール〔一般財団法人 住友生命福祉文化財団〕

■マネジメント：大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504

＊ロビーでは大阪ユニセフ協会を通じて、世界の子どもたちのための募金活動を行っています。

Program

モーツァルト室内管弦楽団　第157回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester / 157.Regulärkonzert

2014年1月19日(日)午後2時●いずみホール

Sonntag, 19. Januar, 2014 14Uhr●Izumi Hall Osaka

～ニューイヤーコンサート・モーツァルト名曲集～

モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

行進曲 ニ長調 K.408-II

Marsch D-dur KV408-II

交響曲 第35番 ニ長調 K.385《ハフナー》(オリジナル版)

Sinfonie Nr.35 D-dur KV385 „Haffner-Sinfonie“ (Originalfassung)

Ⅰ. Allegro con spirito
Ⅱ. Andante
Ⅲ. Menuetto
Ⅳ. Presto

ピアノ協奏曲 第20番 ニ短調 K.466

Konzert Nr.20 d-moll für Klavier und Orchester KV466

Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Romance
Ⅲ. Allegro assai

＊　＊　＊

交響曲 第41番 ハ長調 K.551《ジュピター》

Sinfonie Nr.41 C-dur KV551 „Jupiter-Sinfonie”

Ⅰ. Allegro vivace
Ⅱ. Andante cantabile
Ⅲ. Menuetto：Allegretto
Ⅳ. Molto Allegro

ピアノ：池田　洋子／Klavier：Yoko Ikeda

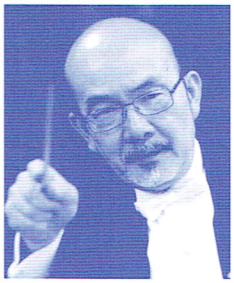
管弦楽：モーツァルト室内管弦楽団／Orchester：Mozart-Kammerorchester

コンサートミストレス：林　泉／Konzertmeisterin：Izumi Hayashi

指揮：門　良一／Dirigent：Ryoichi Kado

Profiles

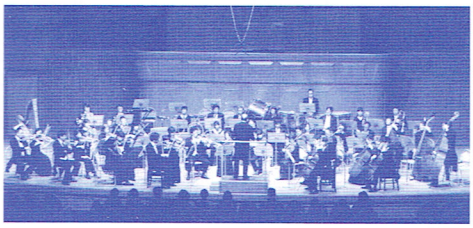
門　良一●指揮　*Ryoichi Kado, Dirigent*



1939年大阪生まれ。フルートを曽根亮一氏に、指揮法を青山政雄氏に師事。1962年京都大学理学部卒業、67年同大学院修了。70年同志とともにモーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり現在に至る。87年モーツァルトのピアノ協奏曲全27曲、交響曲全74曲の連続演奏完結に対し、モーツァルト室内管弦楽団とともに第5回藤堂音楽賞を受賞。1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。

池田洋子●ピアノ　*Yoko Ikeda, Piano*

第7回学生音楽コンクール高校の部全国第1位文部大臣賞受賞。東くめ・照子・貞一、井口愛子の各氏に師事。東京芸術大学在学中に渡仏。パリ・エコール・ノルマル音楽院最高クラスに転入学。ジュル・ジャンティ及びアルフレッド・コルトー氏に師事。日本人として最初のリサンス・ド・コンセール（演奏家資格）を得て卒業。1959年マリア・カナルス国際コンクール第2位（1位なし）、1962年ヴィオッティ国際コンクール金賞などに入賞。パリをはじめ、国内外でのリサイタルは勿論、大阪フィルハーモニー、京都市交響楽団の定期演奏会をはじめ、東京交響楽団、日本フィル、関西フィル、モーツァルト室内管弦楽団など日本の主要オーケストラと数多く共演の他、NHK放送などで活躍。また、ミッシェル・デポスト、レイヌ・フラショーなど内外著名演奏家との室内楽活動も目覚ましい。1990年ザ・シンフォニーホールにて演奏歴30周年記念リサイタルを開催して以来、5年毎に記念リサイタルを開き、2010年いずみホールにて演奏歴50周年記念リサイタルを開催し、いずれも好評を博す。現在、大阪音楽大学客員教授として後進の指導を続けている。一方1996年以来、ニューヨークで開催されるサミット・ミュージック・フェスティバルや、パリ近郊のムーラン・ダンデで開催されるマスタークラスに招かれ、演奏と指導を行なっている。また、ボルト国際コンクールをはじめ、国内外のコンクールの審査員も務めている。川西市在住で、（公財）川西市文化・スポーツ振興財団理事、川西音楽家協会副会長として積極的に地域の文化振興にも尽力している。平成17年度兵庫県文化賞受賞の他、兵庫県生活振興功労賞、川西市民文化賞も受賞している。神戸女学院大学名誉教授、ショパン協会関西支部長。



モーツァルト室内管弦楽団●管弦楽　*Mozart-Kammerorchester*

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、40年以上にわたり一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に16回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス（85、87年）、シプリアン・カツァリス（93、94年）、ペーター・ダム（83、86、88、98、00年）、ウィーンフィル木管アンサンブル（86年）、ライナー・キュッヒル（90年）らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シティオペラとの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。**「素晴らしい成果」（毎日新聞）、「この楽団は注目」（朝日新聞）**。07～09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09～11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を、また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を開催している。

●メンバー

	コンサートミストレス	林　泉					
第1ヴァイオリン	林　泉		川島多美子	チェロ	日野　俊介	ファゴット	佐伯　利之
	本多　智子		原田　潤一		石　豊久		倉永　晴美
	松本　紗希		幣　晴代		大西　泰徳	ホルン	佐藤　明美
	北村　奈美		清水めぐみ		ダヴィッド・フィッシャー		垣本奈緒子
	森住　憲一	ヴィオラ	道幸　明美	コントラバス	林　俊武	トランペット	大西　由起
	菊池　優理		白木原有子		土屋　綾子		中島　真
	中野　瑞己		三上　哲	フルート	大江　浩志	打楽器	光本　諭史
第2ヴァイオリン	中川　敦史		高野ちか子	オーボエ	須貝　絵里		
	黒江　郁子				棚橋　法子		

モーツァルトの交響曲の世界

モーツァルトは音楽のあらゆるジャンルにおいてまんべんなく多くの傑作を残した音楽史上稀な作曲家である。中でもオペラとピアノ協奏曲において特に傑出した作品を生み出している。だが交響曲は彼の興味の中心ではなかったようだ。彼が後半生を過ごしたウィーンでは、ハイドンの交響曲が大人気を博したパリやロンドンとはちがい、まだ交響曲というものが演奏会の中心プログラムとはなっていなかったためであろう。モーツァルトの作曲した交響曲の作品数そのものは約60曲という多さであるが、そのうちの50曲ほどは20歳になるまでのものである。その中には第25番ト短調や第29番イ長調といった名曲があり、その他にもそれなりに魅力的な作品もあるのだが、いずれも演奏会の始まりや終わりを示す曲というマイナーな役割のためのものであった。「後期交響曲」と言われる残りの10曲においても円熟した本格的交響曲と言えるものは第39、40、41番《ジュピター》のいわゆる「三大交響曲」、第38番《プラハ》、第36番《リンツ》、第35番《ハフナー》の6曲くらいであるし、またこれらの曲が今日最もよく演奏され聴かれているのだ。この6曲の中で《ハフナー》は以下に述べるようにその成り立ちも性格も他の5曲とは異なっている。

モーツァルトの作品の中でセレナーデと呼ばれる曲種がある。ディヴェルティメントと呼ばれる曲種とともに当時貴族の集まりにおいて演奏される目的で作曲された一種の娯楽音楽である。モーツァルトに限らず王侯貴族に雇われていた18世紀の音楽家はみなこの種の音楽を作曲する義務があった。モーツァルトはオーケストラ用のセレナーデを10曲ほど書いている。オーケストラ・セレナーデは7、8楽章もある長いもので、冒頭楽章や終楽章は交響曲のそれと似たアレグロで、メヌエット楽章が複数あり、その他の楽章はソロ楽器を伴う協奏曲楽章であった。だから協奏曲楽章と余分なメヌエット楽章を除けば形式的には交響曲と変わらないのである。内容的には第1楽章などでソナタ形式が採られているところではその展開部は短く、曲想も単純で分かりやすく書かれている。しかし、モーツァルトが作曲家として大きな成長を遂げたと言われる「マンハイム・パリ旅行」の後に作られた《ポストホルン・セレナーデ》K.320においては、管弦楽がより豊かになり重厚な表現が多くなって、より「シンフォニック」になっているのだ。モーツァルトという作曲家の非常に興味深いところは、ジャンル間の峻別に厳しかったという点である。上述のように形式的には似通っている交響曲とセレナーデと厳格に区別していた。この点は交響曲という名のもとに、セレナーデやディヴェルティメントといった娯楽音楽や、ソロ楽器のための協奏曲の要素を遠慮なく取り込んだハイドンとは好対照である。モーツァルトには生真面目な一面があり、それに対してハイドンはいい加減とは言わないまでも融通無碍な性格であったと言えよう。そのモーツァルトも多忙で新曲が作曲できないときには《ポストホルン》など旧作のセレナーデを交響曲に仕立て直している。実は《ハフナー交響曲》は当初はセレナーデとして作曲されたのでこの範疇に属する。《ポストホルン》や《ハフナー》の作りはかなりシンフォニックになっていたので、交響曲としても立派なものであった。

そのような事情で生まれた交響曲は別にして、「純粋な」交響曲の作曲においてはモーツァルトは弦楽四重奏曲の場合と同様に先輩のハイドンから多くのものを吸収している。その典型的な例が《リンツ交響曲》である。《リンツ》の譜面はハイドンの曲のコピーかと思えるほどハイドンそっくりである。しかし似ているといってもハイドンの既存のどの作品とも違うのだ！ハイドンに私淑していたモーツァルトはハイドンの手の内を知り尽くしていたのであり、《リンツ》においては「いずれこのように書くだろう」とハイドンの未来予測までしているのである。

《プラハ》は《リンツ》とは全く違う曲である。ハイドンの影はほとんど窺えず、まさにモーツァルトならではの交響曲である。ハイドンの確立したメヌエット楽章を含む4楽章形式を採らず、メヌエットなしの3楽章にしたところがユニークであり、意図的にハイドンからの脱却を図ったことは明らかである。第1楽章の長大な序奏に特に顕著なように全曲が極めてロマンティックであり、曲想が非常に多様でオペラ的であって「オペラ交響曲」と呼ぶのがふさわしい。だが、よく言われるモーツァルトの「光と影」の「影」の部分が多く、交響曲としてはいささか繊細に過ぎ、神経質な音楽である。

〈3大交響曲〉(第39～41番)は、モーツァルトが再びハイドンの流儀に回帰した作品である。ハイドンの6曲からなる〈パリ交響曲〉の最初の3曲(第82番　ハ長調《熊》、第83番　ト短調《めんどり》、第84番　変ホ長調)がそのモデルであるとみなされている。この中では《39番》が健康で明るく、最もハイドン的であると言えよう。《40番》と《41番》においてはモーツァルトはハイドンに倣うといってもその昔の様式にこだわったようである。《40番》ではハイ

ドンの10年ほど前の一連の短調交響曲のスタイルである「シュトルム・ウント・ドランク(疾風怒濤)様式」に立ち返り、《41番・ジュピター》においてはハイドンが以前に多く取り入れていたバロック時代のポリフォニー(多声音楽)を模している。まさに保守主義者、懐古主義者モーツァルトの面目躍如である。そのような一見「古くさい」スタイルを深く掘り下げて、《40番》では自己の魂の深淵を垣間見せるような、後世のロマン派顔負けの過激な表現を見せ、《ジュピター》では一転して宇宙空間の超時空的展開をも思わせるような壮大な音楽を創造している。ハイドンの交響曲があくまで人間的な次元に留まるのに対して、モーツァルトは超現実的な別世界にわれわれを誘うのである。彼以後の作曲家が決して表現することのできなかった、まさにモーツァルトならではのユニーク極まりない交響曲であろう。

行進曲 ニ長調 K.408-II／交響曲 第35番 ニ長調 K.385《ハフナー》

今日《ハフナー交響曲》として知られる作品は、1782年に既にウィーンに移住していたモーツァルトにザルツブルクの父親を通じて、ハフナー家の叙勲の祝典用に依頼されたセレナーデが原曲である。ハフナー家はザルツブルクの市長も出している名家で、モーツァルトは以前にそこの令嬢の婚礼用にセレナーデを作曲している(《ハフナー・セレナーデ》K.250)。原曲にはセレナーデには付きものの行進曲が1曲含まれていた(K.408-II)。モーツァルトはこの行進曲を除いて4楽章とした上に、第1、4楽章にフルートとクラリネット各2本を追加して交響曲とし、1783年3月23日に行われたウィーンのブルク劇場での自作演奏会で用いた(この演奏会はモーツァルトが生前自分で催した中で唯一全プログラムの記録が残っているもので、モーツァルト室内管弦楽団は1991年(日本初)、2003年の2回、全プログラムを再現する演奏会を開催している)。本日は行進曲をつけた原曲のセレナーデの形で演奏する。

ピアノ協奏曲　第20番　ニ短調　K.466

1785年(モーツァルト29歳)に作曲。全23曲のピアノ協奏曲のうち、第24番ハ短調K.491とともにただ二つの短調の曲である。モーツァルトのそれまでのピアノ協奏曲のスタイルが一変した画期的な作品である。木管楽器との室内楽的協奏が多かったそれまでの作品から変わって、オーケストラが重厚で交響曲的な響きを持ち、ソロの部分はモノローグ的なパッセージが多くを占める、後のロマン派協奏曲の原型が生まれたと言えよう。ベートーヴェンが愛好してみずからカデンツァを書いたこともあって、モーツァルトのピアノ協奏曲中最も人気の高い作品である。

交響曲 第41番 ハ長調 K.551《ジュピター》

この曲を含むいわゆる〈三大交響曲〉は1788年の夏のわずか3ヶ月の間に次々と完成された。第1楽章は「ジュピター」の名にふさわしい非常にシンプルながら堂々とした音楽であり、ハイドンの影響が強く窺われる。第2楽章は極めて優美で風格のあるモーツァルト独特の緩徐楽章。第3楽章は格調高いなかにも哀感の漂うメヌエット。そして終楽章はバロック時代の主要様式のフーガをモーツァルト風に料理した壮大な終曲である。特にそのコーダ(終結部)において、この楽章で使われた4つの動機が同時に鳴り響くさまはあたかも宇宙の進行を想起させるようなスケールの大きさである。モーツァルトの最後の交響曲として全くふさわしい名曲である。

KINCHO
無臭でよく効く
1年防虫
タンスにゴンゴン

1年続く
優雅な香り
タンスにゴンゴン
Aroma
アロマ

※洋服ダンス用
引き出し用もあります。
プレミアムブーケ
&
リッチフローラル
の香り
www.kincho.co.jp
● クローゼット用　無臭タイプ
● クローゼット用　プレミアムブーケの香り

「モーツァルト室内管弦楽団を応援しよう！」ご賛同者

「モーツァルト室内管弦楽団を応援しよう！」キャンペーンに対し、下記の方々からご賛同をいただきました。お名前を記載させていただき、厚く御礼申し上げる次第です。（敬称略）

＜ご寄付をいただいた方＞

稲垣千代子、田中　敞、津田 暁子、河野 幹雄、金定 秀光、碓井 昭彦、碓井みち子、阿部由美子、笠松 規子、小柳 陽一、渡辺 優子、三谷 郁子、祐野 周三、谷口 安平、祐野 尚子、隅谷 正一、橋本 靖昭、石光 正男、中東富佐子、萬野 尊昭、西川 保子、深田 晴世、中村智代子、奥村 一二、髙松 孝之、島村　猛、中井 武司、国友 正和、田中 四郎、杉浦 和子、林六(株)、笹川 忠士

＜新しく後援会にご入会いただいた方＞

法人会員：三孝会、　上野製薬、　三井住友銀行

個人会員：乾　賢次、井狩 彌介、井狩 啓子、西川 文子、原田 隆宏、村上小夜子、増見 達生、東　里香、西村 芳穂、関　英夫、曾我見郁夫、筑瀬 重喜、芋阪満里子、笠松 規子、八幡　順、近藤 康博、松江 忠二、阪本 延夫、宇民　正、髙松 孝之、後藤 喬雄、今西 三郎、今西 道子、匿名希望１名

＜後援会会費を増額していただいた方＞

法人会員：三井住友カード、新日鐵住金、林六、荒川化学

個人会員：能田 久美、岸田 多門

〈ニューイヤーコンサート・モーツァルト名曲集〉ご協賛者

今回のモーツァルト室内管弦楽団第157回定期演奏会〈ニューイヤーコンサート・モーツァルト名曲集〉に対し下記の方からご協賛を賜りました。お名前を記載させていただき、厚く御礼申し上げます。（敬称略）

髙松建設株式会社、大日本除虫菊株式会社

＜定期演奏会予告＞

第158回定期演奏会〈ベートーヴェン・シリーズ〉その4

2014年5月31日（土）14時●いずみホール

指揮：門　良一　　ピアノ：三木康子　　ヴァイオリン：ギオルギ・バブアゼ　チェロ：林　裕

ベートーヴェン：《レオノーレ》序曲 第3番 作品72b／ピアノ、ヴァイオリン、チェロのための三重協奏曲作品56

交響曲 第5番 ハ短調 作品67《運命》

第159回定期演奏会／定期サロンコンサート

〈クライネ・モーツァルト〉第84回例会　〈フランス音楽特集・室内楽編〉―フルートとハープを中心に―

2014年7月5日（土）午後2時●天満教会（南森町）

フルート：大江浩志　ハープ：石井理子　クラリネット：髙橋　博　ヴァイオリン：釋　伸司、中川敦史

ヴィオラ：佐份利祐子　チェロ：日野俊介　お話：門　良一

イベール：フルート、ヴァイオリン、ハープのための2つの間奏曲／ドビュッシー：フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ

フォーレ：組曲《ペレアスとメリザンド》／ルーセル：フルート、ハープ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのためのセレナード

ラヴェル：序奏とアレグロ　―フルート、クラリネット、弦楽四重奏とハープのための七重奏曲

第160回定期演奏会〈カール・フィリップ・エマニュエル・バッハとシュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）様式〉

2014年9月7日（日）午後2時●いずみホール

―門　良一によるレクチャーコンサート―　　フルート：大江浩志　指揮とお話：門　良一

カール・フィリップ・エマニュエル・バッハ：交響曲 ホ短調 Wq.178／フルート協奏曲 ニ短調 Wq.22

ハイドン：交響曲 第44番 ホ短調《哀悼》／ヨハン・クリスティアン・バッハ：交響曲 ト短調 Op.6-6

モーツァルト：交響曲 第25番 ト短調 K.183